

2016年11月15日  
第227号(隔月刊)

題字 住谷悦治



燎原社

(京都の民主運動史を語る会)

代表 井口和起

事務局

京都市左京区高野東開町1-23

第三住宅33-302 井手幸喜

〒606-8107

tel & fax 075 (722) 3823

# 何を顕彰？いつ誰が この場所に？

一連載

京都の民主運動史  
史跡散歩<sup>㉑</sup>

## 俯けに倒れた石碑

(京都市伏見区・桃山城)

伏見の桃山城天守閣西側にイースター島のモアイ石像のように、石碑が背面を上に倒れている。石碑の設立は京都16師団の各編成部隊である。

さて、隠れている表面は何を顕彰しているのだろうか。スケッチをした奥西正史さんは、「忠魂碑」、わたし佐藤は「皇紀二千六百年記念」と推定した。

平和のための京都の戦争展実行委員会が



〈9月例会報告〉京都民主府政と憲法運動

大久保史郎・加藤英範・田中 弘 2

会員消息  
編集後記  
11月例会案内

〈研究ノート〉京都・西陣における地域医療の変遷—住民の医療運動の歴史を辿って

西沢いづみ 5

鈴木元『もう一つの大学紛争』を』読んで——老教師のくり言

岩井 忠熊 7

BOOK『戦争証言 平和への願い 伏見から』若い人たちにこの本を

辻 健司 8

〈この一枚〉松川無罪要求京都蹶起大会 1956年8月

湯浅 俊彦 9

戦後京都の出版と文化

今西 一 10

〈資料〉戦前の日本共産党機関紙「赤旗」に載った京都の記事（上）

16



京都革新府政と憲法運動は車の両輪だった。大久保史郎立命館大学法学部名誉教授と加藤英範弁護士と田中弘・元京都・府市民団体協議会事務局長の三者による「革新自治体の総括」に向けた刺激的な報告だった。(編集部文責)

## 大久保史郎氏基調報告

(おおくぼしろう、立命館大学法学部  
名誉教授・京都憲法会議事務局長)

70年代の京都の憲法運動を革新府政との関連で振り返ってみたい。

### 「革新自治体の総括」は未完ではないか?

1974年に立命大法学部に憲法の助教授として赴任したが、京都・関西はまったくの未体験の地であった。75年から事務局に入り、天野和夫事務局長の下で、加藤英範氏とともに事務局次長となり、70年代半ばから、当時の状況に対応する憲法会議の態勢づくりに当たった。78年杉村選挙をはじめ、京都の憲法運動と憲法会議が難しい時期を迎えた時だったので、さまざまな経験をした。今、安倍改憲の動きに対して、憲法運動がどうあるべきかを考えざるをえないが、この視点から



### はじめに

京都の憲法運動は、全国課題としての憲法改悪阻止と地方自治課題としての「憲法を暮らしに生かす」を掲げた。60年代半ばから70年代後半にかけて、「革新自治体の時代」と言われたが、実は、その評価は未整理のままになっている。ごく最近に岡田一郎『革新自治体』(中公新書・2016)が出版された。勉強になるが、同書は飛鳥田・美濃部革新自治体を対象に、それも社会党サイドから、内情を語つたもので、京都・大阪などを視野に入れた「革新自治体」論には程遠い。本日は、蜷川

中期は60年代半ばから70年代前半まで。67年の美濃部都政の誕生の頃から「革新自治体の時代」といわれ、全國3分の1にまで広がった。都市問題、公害問題が背景となつた。憲法が全国的に定着していく時期である。後期は70年代後半から80年代で、革新自治体の衰退期となる。政党レベルでは、自治体の担い手政党が社共から社

### 革新自治体と憲法運動

戦後における革新自治体の生成・発展をたどると、前期は1950年代か

ら60年代で、戦争の記憶も生々しく、日本国憲法の啓蒙期で、鳩山内閣期の復古主義改憲に抗して、憲法全体の定着を図った時期である。その先駆が蜷川府政で、一期(1950-54)、二期(1962-66)に当たる(朝鮮戦争の最中、ビキニ被爆、原水禁運動、経済復興)。戦前の日本と日本国憲法の原理との落差は大きく、憲法運動は国民主権・人権の憲法原理を「啓蒙・理解」する運動として始まり、拡がった。これを支えたのが再軍備反対・戦争反対の平和意識であって、改憲阻止の形をとつて、憲法の普及・定着が図られたのである。日本の国民にとって、とくに地方自治はまったく未体験で、これを開拓・実践したのが蜷川府政だった。

第二に、世評がいう「革新自治体の時代」は高度成長が生み出した「都市問題」を背景とするが、国政革新への展開はなかつた。そもそもと国政と地方自治は相互に固有の性格をもつ。問題論など言えば、革新自治体を推進した政党・運動の側に国政論や階級論や革命論などはあつても、「住民・市民」論、「自治」論が不在ないし未成熟だった。その中で、京都・大阪などを視野に入れた「革新自治体の時代」といわれ、全国的に定着していく時期である。後期は70年代後半から80年代で、革新自治体の衰退期となる。政党レベルでは、自治体の担い手政党が社共から社れを支えた。

### 蜷川革新府政の意義と役割

戦後の「革新自治体」を最初から充分に、中央政界の思惑に振り回された時期である。京都では杉村敏正選挙(1978)が転機となつた。



第三は、戦後憲法運動は、全国レベルの改憲阻止運動の一方で、各自治体における護憲、人権擁護、民主的取り組みを地道に行つた。そのイニシアチブは政治的には「革新」政党と運動がとったと言えるだろうが、実態は住民・市民、自治体とその関係者による左と右を横断する人々の連携・協力があり、思想や信条をこえたものだつた。これを押しつぶそうとしたのが中央政界という構図になる。蜷川府政はその典型であつた。これが試される今日の実例が沖縄基地問題であり、原発問題である。

### 日本国憲法と日米同盟のせめぎあい

憲法運動は日米安保とのせめぎ合い

憲法運動は民主主義・人権擁護の護憲だけでなく、日本国憲法の平和主義を積極的に展開し、東アジアや世界にむけた平和構想として展開する必要がある。そのキー・ワードは憲法前文の平和的生存権、つまり「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利」であり、積極的な政策提起が求められている。これまで、60年代後半の非核三原則や武器輸出禁止三原則があり、また、非核地帯・核兵器廃絶論、東ア

の中で、人権・民主主義・平和の諸原理の具体化に努めてきたが、90年代から冷戦終結、湾岸戦争を契機に転機を迎えた。ここでは「国際貢献」が叫ばれ、「国平和主義」が攻撃された。憲法擁護運動は国内外の両面から課題と方向が問われるようになつた。95年の戦後50年の村山談話は、戦後日本の原点に戻つて、アジアに対する日本の戦争責任を明らかにしたが、経済面では規制緩和による市場主義の全面化となり、国内的には貧困格差が顕在化する。政治面ではネオ・ナショナリズムが台頭して、日本政治の右傾化が進み、政治は方向性を失つて、「ポピュリズム時代」ともなつた。それは同時に、地方自治は形骸化され、切り捨てられる時代に直面した。

### 憲法運動の今後の課題 平和的生存権の展開

国内外の動きが直結する現代では、

憲法運動は民主主義・人権擁護の護憲だけではなく、日本国憲法の平和主義を積極的に展開し、東アジアや世界にむけた平和構想として展開する必要がある。そのキー・ワードは憲法前文の平和的生存権、つまり「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利」であり、積極的な政策提起が求められている。これまで、60年代後半の非核三原則や武器輸出禁止三原則があり、また、非核地帯・核兵器廃絶論、東ア

ジア共同体論、国連の人間の安全保障論が提唱されてきた。これから憲法運動は、国内外の動きを視野にいれた平和構想の提示を重要な課題とする。昨年の戦争法がこれに逆行することは明らかである。

いまの改憲論は、復古主義的な新国家主義が主流で、保守層を含めた国民全体に展望を示すことができず、とうてい日本国憲法の代案になりえない。日本国憲法は人権保障・国民主権（住民自治）だけでなく、平和主義を憲法原理としている点で国際的にも先駆的

**加藤英範氏報告**  
(かとうひでのり、弁護士・元京都憲法会議事務局次長)

### 京都憲法会議結成時の 情勢について

1965年3月24日に京都憲法会議

が、「憲法蹂躪に反対すること」「憲法改悪を阻止すること」などを目的に結成された。当時の情勢は、前年に憲法調査会最終報告書がでて、三矢作戦の暴露、ベトナム戦争の転換点となつたトンキン湾事件、日韓基本条約の強行可決などがあつた。また、憲法運動としては、1956年に社会党が「共産党系団体は排除する」という組織原則で護憲連合をつくつていたが、全国的



1965年1月に蜷川府知事の記者会見で、京都府政推進の過程で憲法擁護を徹底する。5月3日の憲法記念日前後に京都府と

して憲法行事を行いたい、賛同の行事に援助していくと提案した。3月3日には蜷川知事はポケット憲法手帳を発行するとし、50万部普及となつた。余談だが、1967年東京で革新都政が誕生した

が美濃部都知事は背広の胸のポケットにはハンカチ、京都はポケットにはい

る憲法手帳とちよっぴりライバル意識もあつたという。1968年、事務局長の宮内裕さんが留学先のドイツで死亡とか、68、69年ごろ大学でのゲバ騒動などで学者グループが学内課題でいそがしくなり、活動が停滞した。

1972年ごろから、非專従体制で再開した。5月は府主催の憲法集会と11月は「憲法五団体」(1969年結成)で府が協力して憲法運動の催しに取り組んだ。京都護憲連合・京都憲法会議・京都総評・憲法を守る婦人の会・府市民団体協議会などの5者である。5者の全員一致の組織運営ということで参加団体からのクレームで講師の突然の差し替えなどもあり、苦労させられた。

（法律文化社刊）出版記念会をやつたが、本の帯には杉村敏正さんが推薦を書いていた。

（1979年3月、朝日新聞刊）を読むと、選挙の半年ぐらい前には蜷川さんは杉村敏正自治体問題研究所長（法学部教授・行政法）を後継者に決めていたと記述されていた。実は、前年1977年11月3日から連続講座「回の京都憲法学校を開催した。その成果を2月18日に『住民の暮らしと憲法』

知事選挙投票日の35日前、やつと杉村さんの出馬表明。もっと早くできなかつたのかと、現場では疑問がでていた。

に結成 1990年（平成2・1）に活動停止した。「革新統一」で蜷川民  
主府政を支えようとつくられた。当時、  
京都府保険医協会理事長の医師・中野  
信夫の発想は、労働組合は総評をもつ  
て、わかれわれも民間総評をつくる  
うというものだった。構成団体の特徴  
の一つは、いわゆる自覺的民主勢力と  
は言われていない医療、中小企業、婦  
人、福祉、芸術、学者、宗教などの  
関係団体を広くたばねていることだっ  
た。府市民団体は、蜷川知事の呼びか  
けにこたえて、「憲法を暮らしの中に  
生かす」活動にも取り組んだ。これら  
の運動を裏から支えていたのが稻田達  
夫さんだった。

京都・府市民団体協議会（略称・府  
市民団体）は、1966年（昭和41・2

田中弘氏報告

(たなかひろし、元京都・府市民団体協議会事務局長)

城」後も憲法五団体は継続し、憲法会議は革新共闘のにかわ役をはたしてきたといえる。あの時の杉村選挙では43万票余とったが、山田芳治候補は直前の衆院選の社公民合計票の4割しか集まらず、社会党の基礎票20万票程度だった。林田悠紀夫候補は50万票だった。革新を分断しつつ、社公民路線を竜頭蛇尾にする高等戦略にのせられた。



## 橿円形の憲法運動の取り組み

京都の憲法運動は、護憲連合系と憲法改悪阻止各界連絡会系の二つの流れがあった。

卷之三

以来、1978年4月16日の林田悠紀夫知事の任期が始まる日まで、垂れ幕はかかげられた。誰かが林田知事の意向を体し、垂れ幕を下すよう指示したものだらうが、林田府政の初仕事としてマスコミでも話題となつた。

## 会場からの発言を中心

「憲法を守る婦人の会は1964年発足し、2008年活動停止。12月8日には戦争反対の婦人集会、8月15日を語る記念集会など44年活動した。蜷川婦人党的でピーク時には90人程度。もともとは憲法会議の婦人部として発足し、主体的に活動した」（宇佐美）  
「破防法反対闘争をたたかつた。

「1978年の知事選では大阪から息子が応援にいった」（小畠）

憲法運動はなかなか定着しなかつた」（家野）

「府市民団体協議会がなぜ活動停止になつたのか。鰐川府政は憲法に基づく

## 垂れ幕—憲法を暮らし 中に生かす—秘話

動をすすめる方針を示した。1969年からは、府主催の5月の憲法集会と憲法五団体主催の11月の憲法のつどいが開かれてきた。革新共闘のにかわ役を京都総評と府市民団体協議会などが果たしていくた。

1990年11月、府市民団体協議会は活動を停止したが、府民の暮らしとこころの中に灯された憲法の精神は輝いている。

いつたのではないか。  
一月三日、手元三月五日義  
三

燎原 第227号(2016年11月15日) 4

# 京都・西陣における地域医療の変遷

西沢いづみ

(立命館大学大学院先端総合  
学術研究科博士課程・京都第  
一赤十字看護専門学校講師)

## ——住民の医療運動の歴史を辿つて

あつた医療体制作りなど、住民や医療者の医療の取り組みを意味します。

に焦点をあてた運動へと広がつていきました。

**医療・福祉の主体は住民**  
昨今、「地域医療の危機」や「国民皆保険制度の破綻」などが社会問題となり（本田宏、2006・今村聰、2013）、地域医療再建のために、自治体や企業や医療機関が地域住民の主体的な医療参加の必要性を議論しています（鈴木土身、2012）。しかし、住民の主体的な参加とは具体的に何を意味しているのでしょうか。そもそも医療や福祉の主体は住民ではないのか、という疑問をもつたことが、私が地域医療の研究に取り組むきっかけとなりました。

住民がどのように地域の医療に関わってきたのか、また、医療現場は住民の運動にいかなる影響を受け医療を供給していくのかを、敗戦後の西陣の歴史を辿りながら研究をしています。医療制度や政策の側面からだけでなく、住民や患者がもつ要求と医療者のそれぞれの要求を掲げた実践や医療運動が交差する地点の変容に焦点をあてています。ここでいう医療運動は、医療保障獲得のための運動や生活に

### 住民による医療運動の歴史

住民が中心となつた医療運動は、歴史的に古くから存在します。たとえば、無医村であった島根県青原村で、1919年に医療利用組合運動がおこり産業組合の事業として医療事業が始まりました（全国厚生農業共同組合連合会編、1968）。長野県佐久病院では、戦中から医療とは無縁であった農民が、自分たちのからだを守るために運動をおこしていました（佐久病院史作製委員会編、1999）。全国各地の無産者医療運動は、「労働者農民の病気を労働者農民の病院で治せ」（大栗清美「アピール」と訴えて発足し、戦後は民主的な医療運動として、農村や町で住民が医療にかかわってきました。そのひとつに、研究対象である京都・西陣での医療運動があります。

織元から織機を借りて家で織り、出来高分だけ収入を得るという西陣織の家内労働は、衣食住一体の生活形態を生み出しており、職人をはじめ西陣に暮らす人々の療養は在宅が基本になっていました。医療保険がまだなかつた時代に「医療にかかる人たちは医療を」という目的で、医療者も住民も一緒になつて地域を回り、往診や家庭訪問を中心に医療活動を始めたのです。

この体制は、白峯診療所が1958年に堀川病院となつた後も変わらず、また、経営的に支援したのが住民組織

### 白峯診療所から堀川病院へ

1950年に、西陣の職人たちは自分で資金を出し合い、自分たちのための医療機関、白峯診療所を設立しました。この背景には、それぞれの専門の工程が協業してやつと一本の帶や一枚の着物が出来上がるという西陣の機業構造にもとづく地域性があつたともいえます。

「西陣府政の予算づけは、住民運動のあるところにという立場だったると、地元の要求作りは、どのようになされてきたのか。要求作りが出来ないところはどうだったのか」（加藤）。

「住民が主人公にならざるを得ない。それが住民自治でもあつた。日雇いのおばちゃんを知事室が受け入れてきた」（湯浅）

「戦争が平和かの時だけに、憲法を論じて暮らしに生かす民主府政の再建を望む」（出渕）

### 井手事務局長のまとめ

準備も含め刺激的な例会となつた。民主府政落城後、「燎原」を生み出した人々の想いも重ねながら、革新自治体とは何だったのか、その課題を解き明かすような企画を、是非とも続けていきたい。

零細企業の多い京都は、戦前から労働運動や医療運動が盛んな町でした。これらの運動の波が、敗戦後の西陣の賃織労働者の運動と連鎖し、健康

に焦点をあてた運動へと広がつていきました。

西陣での医療運動があります。

この体制は、白峯診療所が1958年に堀川病院となつた後も変わらず、また、経営的に支援したのが住民組織

「助成会」です。「われらの病院」という意識はここからきています。

1960年代には、国民皆保険制度や老人福祉法など、社会保障制度の充実が図られましたが、一方で産業構造の変化による核家族化や高齢者人口の増加が始まりました。1970年代は、経済不況とともに、医療費の高



1950年、白峯診療所開設当時の写真。左から理事長の神戸善一、所長の早川一光、事務長の橋本信三

騰が老人医療費無料化制度を背景にした老人の長期在院が要因だと問題化されるようになつてきました。高齢者の社会的扶養対策もないまま、福祉拡充は急速に縮小されてしまいました。西陣においても同様で、高齢者の長期入院のため病院は満床状態になり、住民から救急診療の危機感を訴える声があがりました。急性期と慢性期のどちらに重点を置くかという視点の相違で、院内の医療者間でも摩擦が起こってきます。住民出資による医療機関の経営維持の難しさが表面化してきました。しかし1980年以降、寝たきりや認知症高齢者のケアの問題も含め、全国的に高齢者福祉の問題が顕在化し、西陣地域でも福祉活動や在宅医療に重点をおいた運動が活発になつてきました。

### 時代の変遷の中で

私は、西陣住民の医療運動の変遷を通じて、医療者と住民がコンフリクトを繰り返しながら、生活に合った在宅医療体制を確立していく過程を明らかにしてきました。そのなかで、出資し

発言権をもちながら医療に取り組んだ住民の主体性を再発見してきました。このような西陣での医療運動が、昨今いわれている住民の医療参加どのように

異なるのか、現代の地域医療での住民の位置付けを考察することが私のこれからのかの課題です。

時代とともに、地域と住民の関わり方も医療運動の方法も変化していきます。しかし、医療の主人公は住民であるという本質は、変わるべきでないかもしれません。時代ごとに抱える矛盾を克服し止揚していく住民の医療運動を今後捉えていきたいと思つています。

まだ資料不足の状態で、研究も未熟なままであります。諸先輩のみなさまに、お知恵を拝借できましたら幸いです。また、堀川病院の医療動向や住民組織「助成会」に関する資料や情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、どうぞご教示の程よろしくお願ひ致します。

### 参考文献

今村聰、2013、「医療崩壊を阻止せよ。国民皆保険制度と医療の未来（特集公衆衛生の危機）」『公衆衛生』77(1)26-29、医学書院

鈴木土身、2012、「住民の運動が医療を救う」『秋田県・厚生連湖東総合病院の「崩壊」と「再生」』

全国厚生農業共同組合連合会編、1968、「協同組合を中心とする日本農民医療運動史」

本田宏、2006、「地域医療の崩壊は始まつた—現役外科医からの提言（特集医師の労働実態を考える）」『月刊保団連』(915)・410

佐久病院史作製委員会編、1999、『佐久病院史』勁草書房

## 『燎原』の合本「電子ブック版」発売中！

CD-ROM版 各巻価格3000円(送料込)

- 第1巻(創刊号から第50号)
- 第2巻(第51号～第100号)
- 第3巻(第101号～第150号)
- 第4巻(第151号～第200号)



\*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823 (井手方)

# 鈴木元『もう一つ大学紛争』を 読んで——老教師のくり言

岩井忠熊（立命館大学名誉教授）

94年をこえる私の生涯で経験した大事件といえば、まず戦争（戦場体験を含む）、つぎに「大学紛争」といえる。前者については何べんか著書でも論述したし、今になつても求められて講話することがある。だが後者については断片的にふれたことはあつたが、組織的にまとめた文章は書いたことがない。実を言うと頭の整理がつかなかつたのである。立命館発行『立命館百年史』通史2（2006）はバランスよくまとまっている。しかし大学の正史では書けない部分というものが

鈴木氏はあるの紛争にさいし立命館大学の学生運動で文字通りのリーダーだった。その経験と立場から、今までの正史がふれなかつた重大な史実をこの書物では明るみに出している。部落解放同盟朝田派の大学自治介入に際して末川総長が朝田派がわの役割を演じた。大学協議会はじめ大学の機関が動搖した背景にそれが大いに影響した。実は教学部長のたび重なる要求に屈して『大学教育と部落問題』初版の素稿を執筆したのは私である。

鈴木氏はあの紛争にさいし立命館大学の学生運動で文字通りのリーダーだった。その経験と立場から、今までの正史では書けない部分といふのはやむをえまい。

和教育）「罷免」問題が学園振興懇談会の議論された場であつたのである。もつともそこで暴力をふるつたのは学生ではなく、出席の資格もないのに乗りこんできた解同の一部分子だった。そうした事情が学園にやがて暴力がまんえんする引き金となつたことは争えないだろう。鈴木氏は経済学部学生として衣笠キャンパスにあつた。当時の学園本部があつた広小路キャンパスをめぐつておこつた解同の大学自治介入問題を叙述するために、当時の関係者たちへのヒアリングを重ねるなどずい

## 大学の正史が触れなかつた重大な史実を明らかに

要な点は、立命館大学では全学協議会（略称・全学協）という場が制度的に確立されていて、大学の学内理事会、教授会代表と学友会、各学部自治会等および教職員組合が話し合う場とされていた。学園振興懇談会（略称・学振懇）はその小委員会であり、いずれも公開されてきたのである。全共闘といふ、時に身辺の危険をおかしながら、また困苦欠乏に耐えて奮闘した学生諸君にはおそらく感謝をささげざるをえない。貴重な青春の時間をあの闘争のためにすりへらした人たちがあり、病を得た人もあつた。そうしたときせいにあらためて思いをいたしたにちがいない多くの教職員たちも、すでにほとんどが故人である。もはや紛争をしらない世代の人たちが多数となりつつある今日、とくに大学関係者にぜひ読んでもらいたい一書である。



うな話し合いの場を破壊抹殺しようとしたのである。紛争を克服し、衣笠校地への全学移転を完成し、大学改革を実現できたのは、簡単にいえば大学当局がこの場を通じて学生の要求をききとり、学生に依拠することができたからである。紛争後にはとんど立て続けに二部協議会委員長・文学部長・教学担当常務理事という激務を担当した筆者にはその経過が改めて理解できる。

しかし筆者には依拠した学生たちがどのようにたたかったのか、鈴木氏のこの書を読むまでその仔細を知つていただけではない。学生のリーダーだった鈴木氏のこの明快な叙述ではじめてほぼその全容を知ることができたといえる。連日にわたりあの存心

ながら、また困苦欠乏に耐えて奮闘した学生諸君にはおそらく感謝をささげざるをえない。貴重な青春の時間をあの闘争のためにすりへらした人たちがあり、病を得た人もあつた。そうしたときせいにあらためて思いをいたしたにちがいない多くの教職員たちも、すでにほとんどが故人である。もはや紛争をしらない世代の人たちが多数となりつつある今日、とくに大学関係者にぜひ読んでもらいたい一書である。

## 戦争証言 平和への願い伏見から

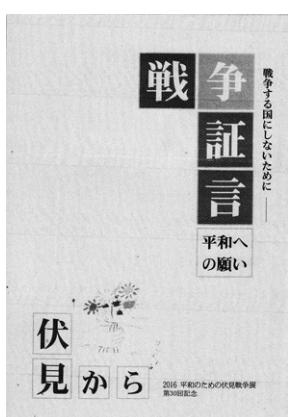
辻 健司（公立中学校教員）

昨年は戦後70周年であり安倍政権による戦争法強行採決の年でした。この本は、平和のための伏見戦争展実行委員会がそうした状況のもとで、記録編集された本です。そこには、岩井忠熊さんの講演も含めて10名の証言が掲載され、巻末に井口和起さんの考察が寄稿されています。どの証言も単なる思い出話ではなく、ましてや自慢話や美談を語っているのでもありません。あとに続く世代に、戦争の実相を伝え、戦後の生き様を語つておられます。その動機は、現在の政治状況と社会的な風潮に対する危機感から来ています。「二度と戦争をしてはいけない」という非常に強い思いです。

◎  
しかし、せつかくの戦争証言が価値を持つためには、まず聞こうという人、読みたいという人がいなければなりません。そのためには、まず多くの人に戦争とは何かもっと知りたいという意欲をもつてほしいということです。同時に、証言を理解するためには近現代史についてのある程度の知識も必要です。そう考えると、この本、歴史教育

育にたずさわる先生方、とりわけ若い先生方に読んでほしいと思います。  
先生方がまず証言をじっくり読む。  
そして証言を教材にし、子どもたちに解説をしながら伝える。そうした流れをつくってこそ証言が価値をもち、痛切な歴史の記憶と教訓をリレーしていくことにつながるのだと思いま

尾孝さん（1932年生）の証言が具体的です。  
第二に、軍隊とはどんなところか。特に新兵教育のすさまじさが語られています。岩井さん（1922年生）の海軍での体験（特攻もふくめて）、駒井和男さん（1927年生）の横須賀通信学校での体験、馬場政雄さ



明さん（1934年生）の満州での暮らしと壮絶な引き上げ（妹と母を亡くす）、手塚良子さん（1935年生）の朝鮮半島全羅道クンサンからの引き上げ、YHさん（1936年生）の朝鮮半島北部からの引き上げ、どれも生死をかけた帰国だったことがリアルに伝わってきます。

第四に、植民地での暮らしぶりがわかります。満州や朝鮮で日本人がどんなことをしていたのか、子どもの視点で語られます。そのほか、1944年15歳で渡満したあと八路軍の医療隊として13年間も中国各地をまわった傍島恭子さん。1915年生まれの奥津岩夫さんは、幼少期を満州で過ごし、帰国後1939年召集され満州へ、2年後会社からマレーへ派遣され1946年に帰國できました。

長島甫子さん（1922年生）は、戦前戦中の伏見の様子や兄の戦死の悲しみを語っています。そしてどの証言者も戦後の混乱期を懸命に生きてこられました。

◎  
証言されたみなさんにお願いです。9条改憲の国会発議があれば、国民投票ではねかえさなければなりません。そんな日が近づいています。そのときみんなさんの証言をライブで聞きたいという多くの人びとがきっと待っています。どうかお元気でおすごしください。

◎  
ます。先生方にとっても子どもたちにしても、教科書だけではわからぬい戦争の多面的な様相が見えてくるはずです。

◎  
証言者の生まれた年や過ごした環境によって体験も異なってきます。この本の証言を読むと、戦争のどんな様相が見えてくるでしょうか。

◎  
第一に、軍国主義教育とはどんな教育だったかがよくわかります。松

## 若い人たちにこの本を

育にたずさわる先生方、とりわけ若い先生方に読んでほしいと思います。  
先生方がまず証言をじっくり読む。  
そして証言を教材にし、子どもたちに解説をしながら伝える。そうした流れをつくってこそ証言が価値をもち、痛切な歴史の記憶と教訓をリレーしていくことにつながるのだと思いま

尾孝さん（1932年生）の証言が具体的です。  
第二に、軍隊とはどんなところか。特に新兵教育のすさまじさが語られています。岩井さん（1922年生）の海軍での体験（特攻もふくめて）、駒井和男さん（1927年生）の横須賀通信学校での体験、馬場政雄さ

## この一枚

## 松川無罪要求京都蹶起大会

1958年8月



# 「無実の被告救え」世論が裁判動かす

(東北本線列車転覆)。1958年8月8日の最高裁判決を前にして円山音楽堂で開かれた集会。作家の広津和郎の呼びかけで、志賀直哉、吉川英治、川端康成、武者小路実篤ら著名な文学者たちが最高裁に公正判決を要請署名を提出するなど運動は広がっていた。

田中耕太郎最高裁長官は「雜音に耳を貸すな」と訓示したが、世論が裁判を動かし、死刑を含む20人全員有罪判決が、最後は「全員無罪」で確定した。

当時、各地域・職場に「松川事件被告を守る会」が組織され、私は京都府庁の「守る会」で保釈中の赤間被告を招いて懇談会を開いたことがある。最年少の赤間被告は、強要された自らの「自白」をきっかけに事件がでっち上げられていった「無念」を語った。

京都府職労への刑事弾圧はその翌朝、1959年10月11日だった。私は含む12人が逮捕されたが、このとき赤間被告から聞いた話が非常に役立った。

(湯浅俊彦)

## ◆原稿募集◆

「忘れ得ぬひと」「闘いの記録」「エッセイ」など、会員の皆さんからの原稿を募集しています。書き遺しておきたいことをぜひ「燎原」に。テーマ、字数は問いません。

「燎原」編集部

◆催し案内

◆チャップリンの独裁者 11月19日(土)  
10時30分と13時30分の2回上映、河二ホール(三条河原町西入る) 上映協力金1000円。

◆社会保障をまもれ府民集会 怒りをもって立ち上がり! 20日(日) 14時  
◆京都学習協集中セミナー 幕末維新期の変革史 20日(日) 13時~17時、京都市職員会館かもがわ。講師=佛教大学原田敬一、受講料2500円

◆京都学習協集中セミナー 幕末維新期の変革史 20日(日) 13時~17時、京都市職員会館かもがわ。講師=慶應大学・大西広。

◆相模原事件から半年 何が問題か? あなたならどうする? 1月26日(木) 13時30分~17時、立命館大学国際平和ミュージアム中野ホール。講師=岐阜大学・竹内章郎。

# 戦後京都の出版と文化

今西 一（大阪大学招へい教授・小樽商科大学名誉教授）



一九五一年『足穂大全 第五卷』現代思潮社、一九七三年）。

はじめに

今年は、出版界を描いたテレビのドラマが多い。コミック業界を舞台にした、黒木華主演のTBSドラマ「重版出来（しゅつたい）」や『暮らしの手帖』の創業者大橋鎮子をモデルにした、NHKの朝ドラ「とと姉ちゃん」が好評であった。それに比べると石原さとみ主演の日テレ「地味にすごい！校閥ガール」は、視聴率は取れているが、話が非現実的だというネットの書き込みが増えてきて「打ち切り」が噂されている。

いずれのドラマも女性が主人公である。一昔前なら『暮らしの手帖』と言えば、「天才編集者」と言われた花森安治を主人公にするのだろうが、今は戦中・戦後を生きた女性の苦難を描いた方が、圧倒的に主婦層に受けようである。もともとNHKの朝ドラは、女性の主人公がほとんどである。

しかし、出版業界のドラマは増えても現実の出版社は大変な危機である。若者の活字離れが進み、デジタルデバイスの普及によつてメディアの多様化が進んでいる。二〇一五年の出版物の販売額が、一年連続で前年を割り込

み（一兆五三二〇億円、前年比五・三%減）出版社の倒産は三八件と増加している。一般企業の倒産件数が、七年連続減少しているのに、出版業界は「不況型倒産」に見舞われている。京都の「出版クライシス」については、現在、『京都新聞』に特集記事が連載中である。

政府が日本の出版業（文化）を守る気の無いのは、在庫品に税金をかけていることが象徴的である。そこで出版社は、再販制によって禁止されている安売りをするか、本を裁断するしか無くなつてくる。安売りを続けるれば、再販制が維持できなくなり、「本を殺す」裁断が増えている。そのため学術書などは、最初から高価格で一〇〇〇部もないかない印刷になる。しかし、大学や図書館も予算がなくて、学術書どころか一般的な本さえ買えない状況である。出版文化が衰退していくのは、現在の世界で進展している「反知性主義」を増大させるだけである。

戦後の日本は貧しかつたが、「知識」には飢えていた。作家の五木寛之は、「若者が貧しい」というが、ギリシャの古典でも、ドイツの哲学書でも、古本屋で一〇〇円で買えるなら、有難い時代ですよ」とテレビで語っていたが、これも一面的な見方である。確かに、若

き日の五木は、神社の境内で野宿同様の暮らしをしたり、血を売つて食事にありつたり、壮絶な生活をしている。私たちの中学生時代でも、本の立ち読みが流行つて、何時間できるか競争したものである。

しかし、現在の非正規雇用の多さは異常である。昨年、ついに雇傭統計で、全雇傭者の四割が非正規雇傭になり、一五歳から二四歳の若年労働では、五割を突破している。若者は、親の年金などに依存する「パラサイト・シングル」になつて、日本は少子高齢化といふ悪循環から抜け出せなくなつていて。若者が「希望」を持てない国に、未来があるのだろうか。「ALWAYS・三丁目の夕日」のように貧しくとも《夢》だけは、いっぱい持つていた敗戦直後に、ノスタルジーを感じるドラマが増えていく。もちろん五〇年前後の若者は、貧しかつたが、ピュアな《平等》感はもつていた。それに比べ現在の若者は、格差社会に絶望している

蛇足を加えれば、民間飛行家の先駆者荻田常三郎は滋賀県の出身であるが、同志社中学を中退して、若い頃に京都で呉服屋を経営している。それに彼が一九一五年、エンジン・トラブルで逝去したのは、京都の深草練兵所であつた（稲垣足穂『ヒコーキ野郎たち』新潮社、一九六九年、藤田洋他『それでも私は飛ぶ 翼の記憶一九〇九一九四〇』オフィスHANS、二〇一三年）。

また小劇場「エラン・ヴィタール」というのは、劇場ではなくて、劇団の名前である。同劇団と東京踏路社創作劇場が、一九一九年一一月、京都の岡崎公会堂で上演した、倉田百三原作の『出家とその弟子』は、日本の新劇史上画期をなす事件であつた（大岡欽治「京都エラン・ヴィタール小劇場の歩ん

一九五〇年から京都暮らしを始めた作家の稲垣足穂は、京都の印象を次のように語っている（「ならびが丘」）

## 一 京都のハイカラさん

思潮社、一九七三年）。

京都は斬新なアイデアは何時だつて先輩格であった。琵琶湖の水をこちらえ誘導する：世界的大工事を明治の前半期にやつてのけている。

だ道』『日本演劇学会紀要』第一八号、一九七九年)。

京都生まれの私から見れば、この稲垣のモダン都市京都の礼賛論の裏側に、安岡章太郎の『京都の人の因習や伝統に縛りつけられた『重さ』』(『美的日本再発発見』『でこぼこの名月』世界文化社、一九九八年)、という言葉が被さつてくる。中年になつてからの一、二、二年間、北海道の小樽や札幌で暮らしてみて、逆に京都の『奇妙な中華思想』(安岡前掲書)や排他性の強さがよくわかつた。

その京都の戦後文化を語るうえで、忘れてはならないのが、戦前の学生の文化運動である。一九三〇年代半ばに、京都を中心に行なわれた雑誌『世界文化』や新聞『土曜日』は、反ファシズム運動として有名である。『世界文化』は、京都大学の美学の教授深田康算の全集(岩波書店、全四巻、一九三〇年)を編集するため集まつた、中井正一を中心、富岡益五郎、長広敏雄、辻部政批評』が発行された。

一九三三年に京大で瀧川事件が起ころが、その時に中井は文学部対策委員の中心となつて活躍するが、久野収は学生代表、真下信一は大学院学生として活動した。しかし、瀧川事件の余波で『美・批評』は第二七号で休刊した。この『美・批評』を復刊させようとし

過して、美学の同人雑誌から文化・思想の総合雑誌に変貌していった。

そこで雑誌の改組・改題が検討され、三五年二月に『世界文化』が創刊される。内容は、欧米の海外文化の紹介、報道を中心としたものである。しかし、ここでのイタリアやドイツのファシズム政権の誕生、フランスやスペインの人民戦線の紹介などは、大きな影響を与える。

『世界文化』は、インテリの情報誌であつたが、三六年七月、『世界文化』の同人と京都松竹下加茂撮影所の大部屋俳優斎藤雷太郎が出会い、斎藤の『京都スタジオ通信』を改組して『土曜日』を刊行した。『土曜日』の巻頭言は、中井と能勢克男(弁護士)が交替で書いている。しかし、読者の投書を重視し、自由なコミュニケーション空間を創り、最終八〇〇〇部まで拡大している。広告主の喫茶店(フランソアが有名)が買取り、コーヒーハウスに含めて客に無料で配布した。喫茶店の文化が、言論的な公共性を創つたことには、もつと注目すべきである。

この『世界文化』や『土曜日』も、三七年一一月、中井、新村、真下が検挙され、その後久野、斎藤、櫛津正志が検挙されている。翌三八年には、和田、能勢、熊沢復六も検挙される。主要な同人の検挙によつて、三七年に『世界文化』は第三四号で、『土曜日』は第四四号をもつて発刊停止となる(山寄雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』風間書房、二〇〇二年)。『世界文化』や『土曜日』は、

迫り来るファシズムに対し、自由主義者とマルキストが共同戦線を組んだ運動として高い評価を受けている。

その『世界文化』の影響を受けて、三〇年代後半の京都には、京大の『学生評論』をはじめ、『京大作品』や『京大俳句』、同志社大の『同志社派』、龍谷大の『宗教と芸術』や『業火』、大谷大の『工房』や『平和』などの雑誌が生まれている。私は、高校時代から『宗教と芸術』を主催していた森龍吉の『親鸞』(三一新書)のファンであったから、六〇年代の後半、龍谷大学で森の『社会思想史』の講義を受けていたが、『世界文化』から学んだスペイン人民戦線の話が、自分の人生を変えた、と聞かされたことがある。

ここでは出版史との関係で、『同志社派』についてだけ触れる。三五年五月に同志社予科の『文芸街』のグループと大学の『同志社文芸』のグループとが合同して、『同志社派』が創刊される。発足時の同人は、田畠弘・高洲正平・多谷泰三・筒井好雄・松井三郎ほかであるが、田畠・高洲・多谷らは社会主義リアリズムの創作を目指してゐた。その時に『世界文化』の同人で、同志社予科の教授でもあつた新村猛、真下信一、和田洋一は、しばしば同人の合評会、読書会、座談会にも顔を見せ、同人誌にも執筆していた。

田畠の証言によると、同人は熱心に社会科学関係の書物を読み、やがて新島会館でマルクス・エンゲルス全集の第一巻の秘密読書会を持つたが、これはたぶん真下の熱心な指導力によるも

のだと語つてゐる。また学外の同人誌『車輪』『リアル』『京都文学』などを交流し、学外からの同人参加や投稿を呼びかけたのは、反体制的な文化戦線を説いた新村の発言に刺激された、と語っている。

三六年の中頃から竹村一、朴元俊(パクウォンジュン)、宮田正平、浅井堯雄などの新メンバーが加わり、それまでのモダニズム的な文学作品が後退し、左翼的な作品が主流をしめ、映画批評や演劇批評が誌面をかざるようになる。竹村は、悪化する社会情勢のなかで、こうしたグループの左傾化は、これらの三教授の精神的な支援なしでは不可能であった、と語つてゐる。例えば朴は、「文学はロマンチックな遊びではない。また少数の限られた選民の御用物でもない。文学は闘争だ。(中略) それ故に文学は常に民衆と共に呼吸すべきものである」といつた戦闘的な文学宣言を行つてゐる(第三卷第四号)。

しかし、浅井は日本共産主義者団の下部組織である瓜生保隆らのグループとの関係で、三八年に検挙され、朴、宮田らも検挙されるが、これは完全な左翼的文学青年の集まりで、サロン派マルキストの寄合世帯に過ぎないと當時を回顧している(郡定也『京都学生文化運動の問題』同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究』みずほ書房、一九六八年)。だが、この時期の同志社は、右翼学生の台頭といふ明徴論文拒否事件、上申書事件、チ

ヤペル籠城事件)などで、リベラリズムの解体が、急速にすすむ時期である(高道基「同志社の抵抗」前掲書二、一九六九年)。ファシズムへの最後の抵抗運動として見る必要があり、「同志社派」に集まつた田畑、竹村、朴の三人が、戦後三一書房を立ち上げた意味を考えてみる必要がある。

## 二、戦後京都の出版社

戦前の京都では、二五社ほどしか出版社は無かつたが、戦後は空襲も殆ど無かつたおかげで、二〇五社ほどの出版社が出来る。ただ中小の出版社が多く、まともな社史もなく、その全貌をつかまえることが困難である。ミネルヴァ書房の杉田信夫が中心になつて、『京都出版史(戦後編)』が、一九九一年に刊行されているが、占領軍が持つて帰つたアメリカのプランゲ文庫の書物との照応がなされていないため、完璧な目録は未完成である。ここでは、『京都出版史』の空白を埋めるために、日本書籍出版協会京都支部が、二〇〇〇年一〇月二八日に開いたギヤラリートーク『わたしの戦後出版史』(社団法人日本書籍出版協会京都支部、二〇〇一年)や杉田の自伝『わたしの旅路』(ミネルヴァ書房、一九八三年)などを使つて概観を見る。

戦後の京都は、他の大都市に比べても空襲が少なく、印刷の機器や資材も残つており、大学、専門学校の数も東京に次いで多く、読者や著者の層も厚かったので、出版に向いた土地であつ

た。そこで二〇五社の出版社が出来るが、日本全体で一九四四年に三七四三社あつた出版社が、戦時統制で二〇三社に減らされており、敗戦時の出版社は三〇〇社であった。四五年九月に統制団体である日本出版会が解散させられ、一〇月に日本出版協会が創設され、それでも会員数は五六六社であった(能勢仁他編『昭和の出版が歩んだ道』出版メディアパル、二〇一三年)。ここからも京都の出版社の数がいかに多いかがわかる。杉田は、「出版ルネサンス」の時代だと言つてゐる。

どんな出版社があつたのかといふことで、杉田はまず中市弘の甲文社をあげている。ここでは中谷宇吉郎の『寺田寅彦の追憶』や『霜の花』などが出版されている。湯川秀樹の『原子と人間』や鈴木成高の『世界の運命と国家の運命』、佐々木惣一、高田保馬ら京大系の本以外に、柳田國男の『西は何方』や武者小路実篤の『湖畔の画商』なども出している。なかなか固い本を出していたが、経営に行き詰まつて五〇年に消えている。中市は、戦前から甲鳥書林という出版社もやつておらず、そこから柳田國男の『野草雑記・野鳥雑記』や『湯川秀樹選集』などを出していたが、やはり経営が思わしくなく、六七年には甲鳥書林新社と改組してまもなく消えてしまった。

京都の出版社は、町の中心中京区に多く出来、そのなかに大手と言われる四社があつた。全国書房は、御池の富小路西にあり、社長は田中秀吉という人物であつた。岡田正三訳の『プラ

ン全集』、石川淳の著作集、『土田杏村全集』、単行本では谷崎潤一郎の『刺青』、『二月堂の夕』、志賀直哉の『蝕まれた友情』など。他に島尾敏雄、岸田劉生、沢瀉久孝、日夏耿之介、芹沢光治良、火野葦平、正宗白鳥、広津和郎、舟橋聖一などの文学者。学者では小林太市郎、浜田耕作、辰野隆、鈴木信太郎、久野健、江上波夫など錚々たるメンバである。特筆すべきは、新村出編の『言林』(二四〇〇頁)を出版したことである。当時としては珍しい外来語や新語を入れた総合的辞典であり、『小言林』や『ポケット言林』も出したが、四九年には消えていった。

そして四条堺町角には高桐書院があり、社長は淀野隆三という人物であつた。淀野は代々鉄商人の家に生まれ、三高、東大の出身で、市会議員もしていた。戦後、鉄の商売が出来ないので、出版社を始めた。自ら『梶井基次郎全集』を編纂し、坂西志保『アメリカの女性』、中島健蔵『ロマンチックについて』、家永三郎『上代倭絵前史』、太宰施門『古典演劇』、吉井勇『京洛遊草』、奈良本辰也『近世封建社会史論』、北山茂夫『奈良朝の政治と民衆』など、次々と力作を出版したが、四九年には倒産してしまった。淀野は上京して出版社に務めたが、後年は明治大学の教授になつた。

次にユニークな出版社として、四条麁屋町下ルにあつた世界文学社がある。戦争中は文芸春秋社の社員であつた柴野彦が始めたが、三高教授であつた伊吹武彦を編集長にした『世界文学』を刊行し、海外の文学や思想、特に実

存主義を紹介した。六〇年代の人文書院のサルトル・ブームの下地を創つた。敗戦直後の京大の学生たちの聞き取りをすると、マルクス主義の影響が圧倒的であるが、伊吹の影響もあって、意外と実存主義が浸透している。伊吹の『サルトル論』をはじめ、木下順二の『山脈』、森本薰全集、織田作之助『夜光虫』、丹羽文雄『幸福』、獅子文六『達磨町七番地』などを刊行している。『世界文学』の編集会議は、今も堺町にあるイノダコーヒー店で開かれていた。世界文学社については、やはり三高の教授であつた土井虎賀須をモデルにした青山光二の小説『われらが風狂の師』(新潮文庫)のなかでよく描かれている。

四大大手出版の最後は田村敬男の大雅堂であるが、これは三一書房とともに別に論じたい。この他には弘文堂、淡交社、電気書院、大八洲出版、白井書店、ミネルヴァ書房、世界思想社、人文書院、汐文社など、ユニークな出版社があるが、紙幅の関係で省略する。また、京都の出版史を語る上で、美術書や仏教書の出版社の歴史も重要なが、これも省略する。

京都の『出版ルネサンス』が急速に終焉したのは何故か?と、四八年頃になると、戦争直後のように本であればなんでも売れるという時代が終わ

いう噂が立ち始めた。そこで全国の書店から日配への送金が滞り、四九年三月に閉鎖された。九月には東販、日販、大阪屋を始め、各地の取次店ができるが、それでも日配従業員二四五二名のうち七一五名は職を失った。

これは日本の出版業界全体に大きな打撃を与えた、倒産する出版社も続出した。先述した京都の大手四社を始め、多くの出版社が倒産した。日本全国で一五〇〇前後の出版社が倒産して、生き残ったのは五〇〇社ぐらいだと言わ

れている。

その後戦後の一〇年間で京都の出版社は、盛んな時の四分の一の六五社に激減した。杉田は、京都の出版社といふだけで、書店からもつと利益率を上げてくれと言われたことがあると語っている。出版は、東京が一流、地方は二流という差別が激しい、とも語っている。情報収集や流通ルートの便利さから東京に移る出版社が多いが、地域の文化を大切にして、学術書、美術書、宗教書などに力を入れることを強調している。それにしても中央への一極集中がひどすぎる。

### 三、田村敬男と大雅堂

田村は、私が会った数少ない京都の出版人である。六〇年代の半ば、高校時代に田村が編集した、「山本宣治――白色テロは生きている」（室賀書店、一九六四年）という本を読んで、戦前、帝国議会で治安維持法の改悪に唯一一人反対して、右翼のテロにあつた山本宣

治という代議士に興味をもつて、田村

を訪ねたことがある。この時、田村は百万遍で昭和堂という印刷・出版社をやっていたが、無知な高校生に「内息子の子どもの頃に、顔がそつくりだ」と優しくしてくれて、素朴な質問に親切に答えてくれた。田村とその周囲の人は、まめに記録を残してくれて、他人に自分のことを書かした『或る生きざまの軌跡』（正・続・自費出版、一九八〇・八九年）や自伝『荊冠八〇年』（あすなる、一九八七年）がある。田村と政経書院については細川光洋の「吉井勇の旅鞄」（『短歌研究』六八巻第八号）など、個別的に触れた論文はあるが、まだ本格的な研究はない。しかし、『荊冠八〇年』は出版史にとどまらず、京都の民衆運動史を知るために必読の書である。ここでは出版史に関する部分だけ紹介する。

田村は、一九〇四年一一月一八日、長野県東筑摩郡里山辺村新井で、父豊茂、母わきえの長男として生まれた。父は竹行李の工場をやつており、家は代々地主であったが、彼の幼少期はそう豊かではなかった。里山辺小学校高等科一年を卒業すると、日本銀行松本支店長の吉井伸助の書生になる。吉井が京都支店長に栄転すると、田村も京都について来て、書生をしながら夜は商工実修学校（四条中学の前身）に通う。しかし、吉井は大阪の加島銀行の常務取締役に就任する。加島銀行というのは、昨年度N H K の朝ドラで今世紀最高の視聴率を稼いだ「あさが来た」のヒロイン白岡あさのモデル広岡浅子

の経営する銀行である。

田村も加島銀行に就職するが、そこで土蔵の扉が倒れて大怪我をする。しかし、左右両足と右手の切断を免れ、これまで回復した。ここで田村は、神の加護を感謝してクリスチヤンになる。

そして、京都転勤を契機に、立命館大学専門部法律科に籍をおいている。また丸太町新道の同朋教会が、滋賀県の膳所で開催した日曜学校教師養成所に入所し、賀川豊彦、杉山元治郎らの講義を聞いて、クリスチヤンソシアリス

トになる。立命館でも非合法の社会科学院に入会し、後の南海電鉄会長の川勝傳ら七人とブハーリンの『史的唯物論』の読書会に参加する。チューターは、夜間部講師の四宮恭二らがあつっていた。このサークルは、本来なら一九二五年に野呂栄太郎らが検挙された京都学連事件で弾圧されていても不思議ではなかつたが、規模が小さかつたので助かつた。

田村は傷の具合が悪化して自殺も考えるが、思い直して京都俸給生活社組合（サラリーマンユニオン）に参加する。そして、加島銀行に公務で障がい者になつたからと五〇〇円の賠償金を請求し、承諾してもらつて退職した。その時に、労働農民党に入党し、河上肇の『貧乏物語』の発行社弘文堂書房の労働争議などを指導した。傍ら労農党教育部員として、左翼の雑誌やパンフレットを配布していた。

その頃、東京の出版社共生閣の藤岡淳吉と知り合い、同店の京都支店から

始まり、後には京都共生閣として独立

した。店舗を河原町丸太町に移すと、特高警察の張り込みにあつた。この時、島崎藤村の『新生』のモデルになつた島崎こま子が、向かい側で長谷川プレッシング店を開いていて、特高が共生閣の張り込みに来ると、窓に白いハンカチを出して、そつと知らせてくれた。そうである。共生閣は、京大前のナカニシヤを始め、彦根、大阪、神戸、姫路から上海の内山書店にまで、非合法の機関誌『戦旗』などを配布していた。

商売が軌道に乗ると、社会科学書の出版に乗り出し、最初、メーデーの話や太田武夫（後、典礼）のソビエト医学研究会に入会し、後の南海電鉄会長の太田遼一郎・斎藤英三の短歌集『獄中にて歌える』などを出版している。一九三三年の京大瀧川事件の時には、『京大問題の真相』といふ緊急パンフレットを発刊し、二万冊が飛ぶようになれた。翌三四年から社名を政経書院と改め、合資会社組織として学術書の出版を始めた。蜷川虎三の『漁村の更正と漁村の指導』や成瀬無極、太宰治門らの文芸書も刊行している。

しかし、政経書院の出版物を一手販売していた京都書籍株式会社の倒産によって、受取手形九万五〇〇円が不渡りとなる大打撃を受ける。この危機を、東本願寺の大谷句仏上人の還暦記念句集の刊行で乗り切つた。一冊一〇〇円で、三三〇冊の限定出版とした。そこで政経書院の経営を打ち切つて、東京の友人藤岡淳吉のやつていた日本青年教育会の教科書出版をするこ

とにした。宝文館を一手取扱店として社長に就任した。三重県の郷土史や農業教科書の一切を取り扱った。採算性も高く、社員も河原町二条から河原町広小路下ルに移し、社員も飯田助左衛門ら三人を新たに雇つた。しかし、この時藤岡の頼みで、助川啓四郎や船田一〇点を、代表名義人として発行してしまつた。これが戦後、「戦犯」として追放になる、最大の理由であった。

この頃、青年教育会出版部も途中で辞して、政経書院を改組して、教育図書株式会社を設立する。社屋も河原町四条上ル、坂本龍馬遭難の家を買い取り移っている。また、京都出版協会の三代目理事に就任している。そのためもあって、戦争末期の企業整備委員に任命され、一四の出版社を合併して、四三年に大雅堂を設立した。社屋は三条烏丸東入ル、今の京都銀行三条支店のあるところに総合書店として発足した。田村は、出版社の企業整備ばかりでなく印刷所の整備や用紙の統制にも奔走した。

戦後、田村は「昭和初期天皇制支配下の特高警察に追われながら、帝国主義戦争反対を心から叫びつつ鬪った苦しかった日々を思い出す時、戦争中の自分のとつた行動を省みて、その矛盾に全く激しい自己嫌悪に陥」り、「失意と矛盾の交錯の果てに『死』を考えたこともある」と語つてている。しかし、戦後の大雅堂は、四六年一月から元読売新聞の嬉野満州雄を編集長に、杉田莊作雑誌課長と三名の女性社員と

で『時論』という総合雑誌を発刊している。関西では珍しい評論雑誌であった。田村は、大雅堂の出版用紙横流しが、G H Qから大雅堂は公職機関に指定され、田村は公職追放になる。関西の出版界で公職追放になつたのは、田村と立命館出版部の富田正二の二人だけだった。大雅堂は、会社の土地・建物を京都銀行に売却して、和田忠次郎が社長になり、実用書を出版していたが、間もなく廃業になつた。

田村は、辞職後、日本科学社を立ち上げ、民主主義科学者協会の山内年彦

らと『学生叢書』(文庫判)を発刊し

ては、「我々は今日こそ一切を擲つて民主主義革命の真只中に投じ、そこから学問の独立と人間性の尊厳を戦い取る」という当時の激しい雰囲気を感じさせる言葉が書かれている。当初の計画では、自然科学・技術四五冊、経済学・哲學宗教・文学芸術各一五冊、政治法律・社会科学・歴史学各一〇冊、合計一二〇冊が予定されていた。初期に刊行されたものは、中井宗太郎『絵画論』、森龍吉『日本佛教論』、重沢俊郎『中国四大思想』、菅原仰『相対性理論』、高橋松蔵『免疫現象化学療法』、北川鉄男『映画社会史』、相沢秀一『経済原論』、原光雄『自然弁証法』、浅井清信『私法原理』、星野元豊『宗教哲学』、船山信一『日本科学者の弁証法』、沼田稻次郎『日本労働法論』、宇尾井久『農政史論』、徳田御稔『生物進化論』、稻岡進『農民運動史』ほかがある。筆者には学生

時代にノートを取りながら読んだ、懐かしい本もある。

田村は、戦後、国民救援会に入り、公安条例廃止期成同盟、松川事件被告救援、京都解放運動戦士の碑の建立、山宣会の活動など、京都の民主運動の先頭に立つた。晩年は京都ライトハウスの館長になり、山本覚馬の発掘などにも尽力し、一九八六年一二月二〇日に八二年の生涯を終えた。彼を慕う人は多く、そのおかげで記録が残つた。

#### 四、三一書房と『人間の条件』

先述したように戦時中の同志社で、『同志社派』という同人誌に集まつた、田畠弘、竹村一、朴元俊の三人が三一書房を創る。最初、大雅堂の編集部長が田畠で、竹村はその下で編集部次長をやっていた。戦後、二人は独立を考え、一九四五年に退職金代わりに本の用紙を貰つて、大雅堂を飛び出した。その時に、百万遍の交差点から西北の方角に向かうと、西園寺の別邸に行く小さな道があつたが、そこで三一書店という古本屋を朴がやつていた。

三一というのは、朴が朝鮮の三一独立運動にちなんでつけた名前であるが、朴自身も『民主朝鮮』に金達寿(キンダクスル)らと並んで小説を書くようなインテリ文学者であつた。そこで田畠らは三一書店をまるごと買い取つて、朴と一緒に三一書房を始めた。トレーズの『人民の子』やジョン・リードの『世界を震撼させた十日間』などの本を出して、結構売

きつかけを掴んだ。

五味川純平(栗田茂)は、旧「溝州」で生まれ、東京商科大学(現一橋大学)に入学するも一年で退学し、東京外国语学校(現東京外国语大学)の英文学科を卒業して、「溝州」鞍山の昭和製鋼所に入社する。ここで後の東大教諭隅谷三喜男と知り合うが、そこから『人間の条件』の主人公梶のモデルは、隅谷ではないかという推測が生まれるが、五味川は「梶の九割はフィクションだ」

などは、初期のベストセラーであった。ただ当時は、書店が整備されていなかつたので、直接郵便振込や為替で注文が来たそうである。

三一書房というと左翼出版というイメージがあるが、同志社の人脈があつて、新村猛やその友人の久野収がよく来て、喧々諤々の論争を六畳と三畳の二間しかない事務所でたたかわせていた。二人は京都人文学園の教師でもあった。竹村は、四八年から東京に行つて、自宅を東京事務所にして編集活動を始めた。田畠は、ミネルヴァ書房の杉田や大雅堂から同志社大学出版部に移った杉田荘作らと計って、金芳堂、法律文化社、有斐閣京都支店の人たちと毎週土曜日に集まる「土曜会」を創つた。そこでは共同の出版目録を作つたり、一緒に旅行したりした。東京に行つた竹村も、大月書店や理論社などの左翼出版社と「木曜会」という集まりを持っていた。そこで理論社の小宮山量平社長と出会つて、五味川純平の『人間の条件』という総計二〇〇〇万部は超えたという大ベストセラーを出版する

と語っている。五味川の「満州」時代の友人に田畠シゲシ（共産党京都府委員会副委員長）などがいた（西口克己談）。そして四三年に召集され、四五年八月のソ連軍の「満州」侵攻の時には、所属部隊は全滅に近い打撃を受け、生き残ったのは五味川ら数名であった。四七年に引き揚げるが、生活をやす惠夫人のミシンの内職に頼つて、電話もない四畳半二間のアパートで、自分の戦争体験をもとに『人間の条件』を執筆した。

一九五六年春までに『人間の条件』は、九〇〇枚に達した。単行本二冊の分量であつたが、もちろん出版のあてはなかつた。ある日、友人で劇団民芸の演出助手の早川昭二に、『人間の条件』の主題を話した。興味をもつた早川は、原稿を読んで感動し、知人の理論社の小宮山の所に原稿を持ち込んだ。しかし、小宮山の所には、無名の人びとの何百枚という長編作品が、いつも二〇篇、三〇篇と持ち込まれていた。小宮山は、毎日自宅でも原稿を読み、午前三時以前には就寝したことのない生活をしていた。そのなかでも小宮山は五味川の原稿を読んだが、理論社では「近日中に出版できない」として、三一書房の竹村に話をまわした。

竹村は、『人間の条件』のナマ原稿を見て、まず驚いた。分厚い原稿用紙のどの頁にも一字の訂正、書き込みもなかつたのである。「僕の今日に至るまでの三十五年の出版生活で、あんな原稿を見たことははじめてだね……『廓』の西口克己の原稿も、書き込みも削除

もない綺麗な原稿だが、彼の場合は訂正個所のマス目に、一字の大きな紙を切つて貼り付ける。しかし、五味川君は、一字一句の直しもなく、はじめの頁から終わりまで、どの字も変わりなく正確な書体で書かれていてね」と語っている。五味川の熱情にうたれたのである。

竹村は、躊躇なく五味川に、「ヨロコンデ シユツパンスル シキウアイタイ」という電報を打つた。竹村は、赤字の三一書房は、『人間の条件』と心中してもよいと思つたと言つてゐるが、その冒險心を支えたのは、戦争体験であつたとも語つてゐる。同志社時代「唯物論研究会に加わり、反戦学生運動をしたため検挙され、拷問につぐ拷問。搦手からの泣き落としなどにより、心ならずも転向」をした。そして、「反抗的でまったく無賴の兵として通した二年間を回想しつつ、たとえどんな兵であつたとしても〈侵略戦争に行つた負い目はいまもある〉と苦渋に充ちた言葉を口にする。その負い目が、戦後一貫しての反権力・反体制で筋を通した生き方の「核」となり、三一書房を、天皇制、朝鮮、部落の三本柱の反権力志向にしている理由である」と語つてゐる。竹村は、社会の底辺に差別を受けて生きる善良な民衆に、温かい人間性を感じ、逆に天皇を頂点とする権力機関の威圧性、強迫性、暴力性、欺瞞性、あるいは、正義はいつもお上にあるという傲慢性に、許し難い堪忍のならない気持ちを抱いていたのだつた」と言つてゐる。それが彼の出版活動の信念であつた。（塩澤

実信『戦後出版史』論創社、一〇一〇年）。その三一書房が、一九九八年一月に、本社をロックアウトし、組合員全員を不当解雇し、二〇〇五年まで裁判するという労働争議を起こしたことを、田畠、竹村、朴らの創業者たちは、どう思つたであろうか。

## おわりに

戦後京都の出版文化のなかには、リベラリズムやマルクス主義の反権力・反体制の伝統が流れている。京都には、戦争の失敗に学び、高い志を持ち、著者とともに考えてくれる優秀な出版人がたくさんいた。今こそその歴史を掘り起こしていくことが大事だと痛感する。

私の専攻した歴史学の分野でも、林屋辰三郎は早くから『歌舞伎以前』（岩波新書）のなかで、戦前の中央の歴史に対する地方の歴史。貴族や武士の歴史に対しても民衆、とりわけ被差別民の歴史。男性を中心とした歴史に対して女性の歴史を描くことを強調している。ところが現在の世界では、「トランプ現象」やヘイトスピーチが蔓延している。一昨年、濟州島で聞き取りをした時に、「在日」で大阪から移住してきたという女性から、「こんなに自由に暮らせて有難い。日本にいた時は、本当に息苦しめた。『朝鮮人は死ね』などというデモの声を、『在日』の子ども達はどう思いで聞いているか、その気持ちがわかりますか」と言わされて、まさに答えられなかつた。

今年の九月二六日には、衆議院の本会議で、安倍首相が所信表明演説で、自衛隊員などへの敬意を示すと呼びかけると、自民党の議員が一斉に立ち上がりつて、約二〇秒間拍手をするという場面があつた。自衛隊や警察を「暴力装置」と言うのさえはばかるような風潮があるが、先日の沖縄県東村の高江地区のヘリパット建設での機動隊（大阪府警）の反対派住民への「土人」（シナ人）発言を聞いていると、彼らの危険な役割がよくわかる。それをまた菅義偉官房長官でさえ遺憾だと表明しているのに、松井一郎大阪府知事が、「御苦労さん」と発言して、機動隊員を慰労するというのは、異常としか言えない。

私は、戦後京都の出版文化のなかで学び、早くから「弱者」によりそい、反権力の歴史学を目指すことをここにがけてきた。東京とは違う歴史学や文化が京都にはあると考えている。それを支えているのが出版文化である。ところがその出版文化が、今日大変な危機に直面している。大学も運営交付金を削られ、産学共同どころか軍学の共同も常態化してきている。歯止めのきかない右傾化で、歴史はもう一度過ちをくりかえそうとしているのだろうか。

（付記）本稿は、二〇一六年一一月三日に第四〇回京都古本市で講演した内容である。

# 京都の民主運動史を語る会 11月例会

とき 11月26日(土) 午後2時~

ところ 京都市職員会館かもがわ 第1会議室  
河原町竹屋町東入、石長旅館の奥

## テーマ 京都のキリスト者の平和運動

——60、70 年代、自由と平和をつくるキリスト者の会の運動を中心に——

語る人 出口玲子さん（日本キリスト教団信徒）

60年代、戦後社会のあり方に異議を唱える、これまでのキリスト者の運動とは異なった自由と平和の大切さをアピールする独自の運動が、京都で生まれた。京都のキリスト者が生み出した「自由と平和をつくるキリスト者の会」(略称自平創)の運動で頑張ってこられた出口玲子さんに「自平創」とその前後のキリスト者の運動について語っていただく。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。  
会員外の方は資料代300円。

▼表紙のスケッチのため、ロケハンティングをする。今回から写真とスケッチを交互にする一本立てを企画してみる。読者からの情報提供も期待。▼表紙のスケッチをお願いした奥西正史（おくにしげふみ）さんは、1951年生まれ、英語教師として、アレン・ネルソンの「九条を抱きしめて」DVD版普及などをつうじて、英語教育と平和学を探求されています。今回は第16師団の

P 1 白抜きの見出し 東山靈前觀音 (誤) ↓ 東山靈前觀音 (正)

写真説明の下に「宗派に關係なく」 (誤) → 「宗派や敵味方に」 (正)

P 10 一段目後ろから10行目、水口春樹 (誤) —

水口春喜 (正)。

同 四段目後ろから11行目の中見出し 「94年の歴史」の前に「日本共産党」を挿入



長らく休止になつていていたホームページを再開することとなりました。例会案内や会員募集はもちろん、会報燎原の記事検索も出来るようになります。詳細は新年号に掲載させて頂きますので、お楽しみにしていて下さい。

会費未納の方、会費納入をよろしくお願ひします。問い合わせは事務局までお願いします。

戦争遺跡が放置されている現場をスケッチしていただきました。

▼第226号にも校正漏れがあり、以下訂正します。

# 戦前の日本共産党機関紙 「赤旗」に載った京都の記事（上）

經  
コ日勞米倒ブ帝制共勵天戰衆ツフをス地肥不小貨軍短強資タニ朝遣上滿勞  
經  
コ日勞米倒ブ帝制共勵天戰衆ツフをス地肥不小貨軍短強資タニ朝遣上滿勞

非合法時代の日本共産党中央機関紙「赤旗（せっき）」の復刻版（三一書房発行、全4巻）が1952～54年に発行された。私はまだ高校生だったが55年11月7日に開かれた社会主义革命記念集会の会場で購入、その場で宮本顯治書記長（当時）に署名してもらった。定価各650円、A4判250～266頁、函入りの本である。

この復刻版に載っている京都の記事を全部記録し、「京都民報」1967年7月19日号に掲載したことがあるが、資料として転載する。(湯浅)

同志山本宣治、白色テロの兇刃に倒る！

(1929年3月20日第27号)

5日午後9時20分、同志山本宣治は白色テロの兇刃の下に倒された。(略)

彼は現在の「無産党代議士」の中で、階級的立場にふみとどまつた唯一の人であった。それ故に、敵は「無産党代議士」の中で彼を選んで殺したのである。(略) 彼は血を以て階級戦士たる名誉を買ったのである。故に我が党は今や同志山本宣治を我が党員としての資格を以て葬るのである。

我が労働者農民は同志山本を犬死させてはならない。彼の死に対する革命的復讐戦こそ我々に負わされた任務である。

ビル屋上からビラ 8・1反戦デー

(1932年8月25日第90号)

弾圧に屈せず、警戒に怯まず 31 日から 1 日の払暁にかけて市内各所に反戦ビラまき、伝單貼りが敢行された。1 日午前 11 時、厳重な警戒網を潜って京都駅前丸福百貨店屋上から烏丸通りへ数十枚のビラが散布され、京都消費組合壬生支部は反戦デーを期して「政府払下米の値下げ、無償払下の陳情」を示すべく上京区千本丸太町旧刑務所跡に集合し約五六十名の組合員は「米を与へろ！」のスローガンを掲げて府庁へ向けデモに移らんとしたが西陣署の警官共のため六名検束され、目的を果たさなかつた。

拷問に屈せず 出版の同志虐殺さる

(1932年10月30日第102号)

全協出版旧京都支部常任委員同志朴震は反戦デーを前に京都松原署に検挙され、残虐な拷問の結果9月30日遂に虐殺された。警察ではこの事実を誤魔化すために脚気衝心と称している。だが同志は非常に健康体で脚気等で死ぬような男ではない。同志朴は警察のあらゆる拷問追及に一言も語らず組織の秘密を死を以て守り続けたのである。